

白山：霊峰

白山、すなわち「はくさん」は、富士山と立山（「たてやま」とも。富山県に位置）と共に日本の三大霊峰のひとつとされており、先史時代から現在に至るまで畏敬の対象となってきた。この2702メートルの火山は、何世紀にもわたって繰り返し噴火してきた。直近は1659年だ。その予測不可能な力は、水や食料、その他生活に不可欠なものに関して、それでもなおこの山に頼っていた地元の人々の中に、歴史を通して畏れと尊敬の念をかき立ててきた。まとまった形で白山信仰は、8世紀に始まったと考えられている。当時、仏教の修行者たちが白山を修行の地として使用し始めたのだ。このような信者たちは登頂して、霊的な修養を自らの身に染み込ませるため、しばしば山中で長期間過ごしていた。

やがて、修行者たちのこの信仰は、山の四方八方の地域へと広がり、そこには山の神々を遠くから崇拝するための神聖な場所がつくられた。そのような「白山神社」は、岐阜、石川、福井といった近隣県にわたって最もよく見られるが、北は秋田から南は福岡まで、とりわけ日本海沿岸にも多数存在する。この分布は、白山信仰が船乗りによって広まったためである可能性が高い。船乗りにとって白山は、荒れがちで油断のできない海において方向感覚をもたらしてくれる重要な目印だった。

白川郷では少なくとも中世の時代から、白山信仰は、地元の宗教的な習わしの中心的な要素となってきた。白山を崇拝していた初期の仏教修行者たちのほとんどは別の方角から登頂していたものの、この地域からは2本の古い登山道が山頂へ続いていたことが知られている。白山神社は、荘川の溪谷の至るところに多数残っている。